



国立博ウポポイ



古式舞踊実演＝白老町の旧アイヌ民族博物館で

しらおい

北海道・白老に先住民族アイヌの歴史文化を伝える国立博物館「ウポポイ」が整備された。4月22日開館予定だったが新型コロナウイルスに見舞われ5月29日に延期。さらに緊急事態で大幅な日程変更を余儀なくされた。愛称ウポポイはアイヌの言葉で「歌うこと」。みんなで集まって歌い盛り上がる。正式に「民族共生象徴空間」と呼ぶ。博物館には珍しい名称だが、「共生」は複数の民族が協調し互いに豊かな生活を目指す思いを示し、「象徴」はアイヌの歴史文化に理解を深め「先住民族の尊厳を尊重」するシンボルの意味を込めた。国民全体が共生する象徴として「差別のない多様で豊かな文化を持つ活力ある社会」へ歩み、この空間を心のよりどころとして歴史と未来につながる世界観、自然観を学ぶ。

共生する先住アイヌ民族の象徴空間

ウポポイは3つの施設「国立アイヌ民族博物館」「国立民族共生公園」「慰霊施設」で構成する。博物館はアイヌの言葉や工芸など存続の危機にある民族文化を「ことば」「世界」「暮らし」「歴史」「しごと」「交流」の6つのテーマで展示する。イヨマンテ(熊などの儀礼)、カムイノミ(神への祈り)、ペッカムイノミ(川神の祭り)など四季の祭事、儀礼を紹介し、装具や着物、文様、生活道具、暮らしの知恵、自然素材の加工、建築技法、丸木舟の製作技術などを学ぶほか、じかに展示に触れるテンパテンパ(さわってねの意味)のコーナーもある。共生公園は生活に根付く40種以上の樹木や草花が育ち、着物の繊維になる樹木オヒョウや、ござを編むガマ、薪や火おこしに使うハルニレなどの植生や湖畔の風景を楽しむ。公園内のホールでムックリ(口琴)、トンコリ(五弦琴)の楽器や古式舞踊を観賞し、点在するチセ(住居)や工房で木彫り、刺繍、かご作り、ござ編み、糸作り、狩猟の笛作りなど体験。カムイ(神)に供えるごちそうの一つ、シト(団子)を作り試食する。春は鱒、秋は鮭を

獲り、鹿や熊や山菜など命の糧を得て無駄なく使い、海や川や山の自然を敬いカムイに祈る感謝の生活に思いを馳せる。「慰霊施設」はアイヌの遺骨など集め墓所を整備した。

北の大地で狩猟や漁労、採集を生業とする民族の歴史は平坦でなかった。15世紀(室町時代)ころから本州と交易を巡って繰り返された争いは江戸時代に至り、明治には「開拓」の旗を掲げた日本政府の同化政策で蝦夷地を1つの国に併合する流れに巻き込まれた。サケ漁やシカ猟が禁止され、サケを迎える儀式、熊の霊送りなど「固有の文化を否定され、いわれない差別を受けるなど、苦難の道」を歩んだ。交易で伝わる疫病の蔓延もあって自治能力が低下し隷属を強いられる。交易で新しい生活環境が生まれ、疫病克服に手を差し伸べられた記録もあるが、民族を踏みにじる「開拓」の反省は強く、北海道百年記念に開館した開拓記念館は半世紀近く経った2015年大幅に展示替えし名称も道立北海道博物館に変えた。

自然の尊厳と生活の価値観を学ぶ

いま世界は新型コロナウイルスの超大嵐が人類を震撼させている。忍の一字の毎日、なんとか前向きに捉えて生活習慣や行動を見直す機会にもなった。巣ごもりの中で手料理の味を覚え、マスクなど手作りを体験し、自分でできることを工夫する。自粛続きで日々の活動がよどんだら、澄んだ空が蘇ったとの報告もある。経済尊重の豊かな環境に恵まれた、生活や儲けももちろん大切だが、それらを求め続けて未来はあるか。このコラム筆者は大学時代に管理工学を専攻し、社会に出ても物事や考え方の効率や最適な作業の進め方、利益拡大の求め方などを学んだ。その裏返しに合理化は万能でない、100%完全な技術などありえないことも知り、原発事故や疫病禍、過去の公害がそれを実証した。ネットウイルスも怖い。多くの人たちが享受するネット社会やスマホ文化、開発を競う車の自動運転技術なども、メリットの裏にデメリットがある。便利さや合理化に溺れることなく、偏った考えを見直し、経済活動や身近な仕事を総合的に進める大切さが身に染みる。自然の畏れを心にとめ、恵みのありがたさをかみしめる。ウポポイを訪ねて、単に一民族の歴史文化を学ぶだけでなく、人間社会のありよう、人類の幸福とは何か、長い弾圧搾取の歴史と、自然に培われたアイヌの生活文化を学ぶ意義は大きい。

(文・写真 林 莊祐)



国立アイヌ民族博物館の外観(ウポポイのホームページから)

